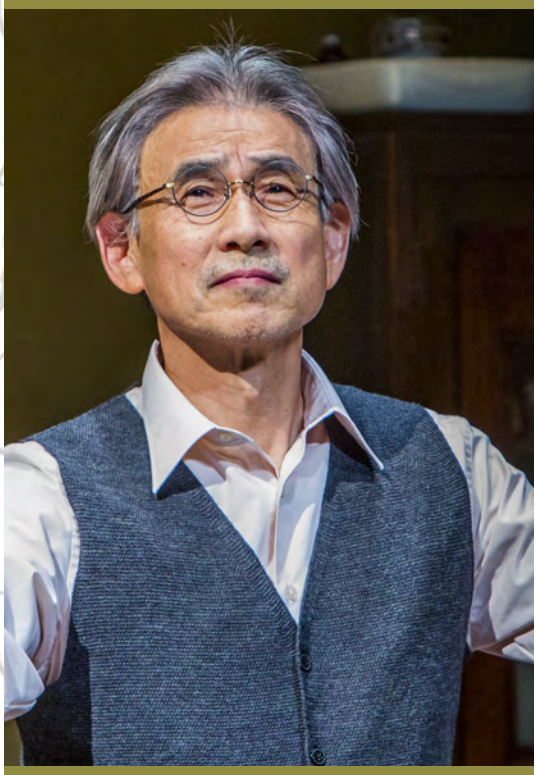
劇団民藝公演

二大作家の傑作短編を、朗読の名手二人が江戸情緒たっぷりに届けます。

篠田三郎・樫山文枝 文学の夕べ

第一部

山桜



作 藤沢周平

第二部

夜の辛夷（こぶし）

作 山本周五郎

演出 丹野郁弓
照明 石坂晶子
音響 岩田直行

夜の辛夷

権現前の岡場所の女・お滝は、二十四になる子持ち。凶状持ちが逃げ込めば岡っ引きに密告して礼金を得、客には年を偽って稼ぐため、朋輩に罵られています。
ある十二月の寒い晩、彼女は岡場所になどに来る人柄とは違った元吉という職人風の客をとりました。「寝床を二つ取ってくれ」という元吉に「もういらっしゃらないわね」とお滝。
しかしまた彼はやってきたのでした……

山本周五郎（1903 年～ 1967 年）
大衆小説家。本名清水三十六。山梨県大月市生まれ。横浜市立尋常西前小学校を卒業後、木挽町（銀座）二丁目にあった質店の山本周五郎商店に徒弟として住み込むが、関東大震災によって被災し、その後は豊橋、神戸へ転居。神戸で「夜の神戸社」へ編集記者として就職するも翌年再び上京。帝国データバンクに入社、文書部に配属。1926 年に文藝春秋の懸賞に応募した「須磨寺附近」が掲載され文壇出世作となる。1931 年東京都馬込東に転居。馬込文士村の住人になる。このころから少年探偵ものや冒険活劇から時代小説へと作風が変化していき、一躍流行作家となる。本人は純文学と大衆文芸の区別を認めず、「面白いものは面白いし、つまらないものはつまらない」という信念で小説を書き続けた。没後功績を記念し、山本周五郎賞が創設された。劇団民藝公演では、74 年『赤ひげ』（倉本聰脚本）、95 年『研師源六』（砂田量爾脚本）、同年稽古場公演『樅ノ木は残った』がある。

樫山文枝（かしやま・ふみえ）
東京都生まれ。63年俳優座付属養成所を卒業後、民藝俳優教室に入る。『アンネの日記』アンネ・フランク役でデビュー。NHK朝の連続テレビ小説「おはなはん」でお茶の間の人気を博す。『海霧』で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。最近の舞台は、『ペーパームーン』、『正造の石』、『異邦人』、『ワーニャ、ソーニャ、マーシャ、と、スパイク』、『集金旅行』など。舞台を中心に、映画、テレビ、ナレーションなど幅広く活躍している。

山 桜

海坂藩の下級武士の娘・野江は、前の夫に病気で先立たれ、磯村庄左衛門と再婚した。ある叔母の墓参りの帰りに、磯村家よりも前に縁談の申し込みがあった剣術の名手・手塚弥一郎と偶然出会う。野江が手塚との縁談を断ったのは、剣術をする人は怖い人だとの思い込みからだった。しかし実際に話をしてみると、手塚は正反対の心の優しい男であることが分かり、その日から野江は手塚のことを意識するようになった。山桜が満開の頃であった……

藤沢周平（1927 年～ 1997 年）
本名小菅留治。山形県鶴岡市生まれ。山形師範学校を卒業し、湯田川中学校の教師となるが、二年後に肺結核が発見され、療養のため休職。翌年、東京都東村山の病院に移り、退院後は練馬区貫井に住み業界新聞の編集者として生活する傍ら小説を執筆。43 歳の時に「溟い海」により第 38 回オール讀物新人賞を受賞。その二年後の1973年「暗殺の年輪」により直木賞を受賞する。市井の人々の心情を細やかに救い上げる視線は、「蝉しぐれ」「たそがれ清兵衛」「山桜」「橋ものがたり」「三屋屋清左衛門残日録」などの名作の数々に結実し、多くの読者の心をとらえ続けている。「白き瓶」により吉川英治文学賞、「市塵」により芸術選奨文部大臣賞のほか、菊池寛賞、朝日賞など受賞多数。1995年紫綬褒章受章。劇団民藝公演では、05 年『深川暮色』、08 年『海鳴り』、11 年『思案橋』の原作（共に吉永仁郎脚本）がある。

篠田三郎（しのだ・さぶろう）
東京都生まれ。1965年大映映画のニューフェイスに合格。映画では71年「高校生心中　純愛」、テレビでは「木下恵介・人間の歌シリーズ」でデビュー。主な映画出演作に「金閣寺」「遠き落日」「ひめゆりの塔」「山桜」など。初舞台は76年の『恋ちりめん』。主な舞台出演作に『枯れすすき』、『細雪』、『喝采』、『日本の面影』など。劇団民藝公演では、『八月の鯨』、『SOETSU』、『闇にさらわれて』、『ある八重子物語』がある。